

# 「教育県大分」創造に向けた地域別意見交換会 in 佐伯 開催概要

[開催日：平成31年2月13日（水）]

## [学校訪問①] 小中一貫校 蒲江翔南学園

[訪問者] 大分県教育委員会（工藤教育長、教育委員、理事、教育次長 他）  
佐伯市教育委員会（土崎教育長、教育委員、教育部長 他）

小中一貫校蒲江翔南学園では、保護者・地域の皆さんの願いや思いを大切に、校長のリーダーシップの下、学校の重点課題に基づいた5つの「翔南プロジェクト」を設定し取組を進めています。

### ①「蒲江とともに歩む学園」づくり

本年度よりCSを立ち上げ、学校・家庭・地域が協働し、それぞれが主体性をもって重点目標達成に向けて取り組んでいます。

### ②児童生徒の成長に資する小中一貫教育の推進

教育システムを「6・3制」と「4・3・2制」を融合させ、小中の学びの連続性を重視した教育活動を行っています。

### ②「主体的・対話的で深い学び」を実現する組織的な授業改善

「中学校学力向上対策3つの提言」に沿った取組を一層推進するため、児童生徒による「授業評価」を実施し、その結果に基づいた改善策を打ち立て、授業改善を行っています。

### ④健康安全教育・管理

地震・津波・火災を想定した防災の基礎知識・技能の習得はもとよりスクールバス乗車時及び徒歩・自転車通学時の実践的な訓練を実施しています。

### ⑤特別支援教育の充実

通常学級に在籍する支援の必要な児童生徒に対して個別の指導計画を作成し、きめ細かな指導の充実に努めています。

その結果として、小・中教職員の協働態勢の構築や保護者・地域からの信頼度の向上、児童生徒の落ち着いた仲の良い学園生活などの成果が見られるようになった反面、児童生徒の学力・体力の向上、教育活動の充実と教職員の働き方改革のバランス等の課題が報告されました。



甲斐校長による学校説明



「生活科」の授業風景

## [学校訪問②] 大分県立佐伯豊南高等学校

[訪問者] 訪問先①に同じ

県立佐伯豊南高等学校では、①「生徒、保護者や地域が信頼を寄せる教育システムの充実と定着」②「地域に貢献できる人材の育成のため総合選択制高校の利点を生かした教育システムの確立」③「進学、就職の両面に強い教育システムの充実」を学校の教育目標に掲げ、総合学科、工業技術科、食農ビジネス科、福祉科それぞれの特色を生かした教育活動を推進しています。

また、「主体的、対話的で深い学び」の視点からの授業改善を推進しており、「身につけさせたい知識や技能を明確にし、指導すべき内容を整理した授業」を通して学力向上に取り組むとともに、学科間の連携を通してキャリア教育の充実に努めることで、生徒の主体性を重視し持てる能力を発揮させていく取組が行われていました。



福祉科の授業風景

**[意見交換会テーマ] 「芯の通った学校組織」を基盤とした大分県版「チーム学校」の実現**

- (1) いじめ・不登校の未然防止に向けた組織的取組の推進について
- (2) 「地域とともにある学校づくり」に向けたコミュニティ・スクールと「協育」ネットワークの連携について

意見交換会では、市全体の取組状況の説明の後、各学校長から自校の現状・課題についての説明も交えながら2つのテーマについて意見交換を行うなど、充実した協議をすることができました。

**(1)いじめ・不登校の未然防止に向けた組織的取組の推進について**

①いじめ問題に係る現状・課題

《現状》

- ▶各学校が児童・生徒のきめ細かい見取りに取り組んだ結果、H29年度小・中学校におけるいじめの認知件数は572件に増加した。
- ▶いじめの態様としては、冷やかしかからかい、悪口や脅し文句等が全体の3分の1を占めている。

《課題》

- ▶いじめの定義や認知に対する教職員間での差や、保護者と学校間でのいじめ事案に係る認識の違いがある。

②不登校に係る現状及び課題

《現状》

- ▶「家庭に係る状況」、「いじめを除く友人関係をめぐる問題」、「学業不振」等の要因により、H29年度の不登校は小学校で30人、中学校で51人となっており、これは前年度比で小学校は36.4%増、中学校は9%減であり、過去5年間で最多となった。

《課題》

- ▶関係機関との連携による支援や個に応じた支援の充実が課題となっている。

【主な意見】

- ▶いじめの対応については個人毎にことなるため、学校でどう進めていくべきか慎重に考えていかなければいけない。また、関係機関と連携しながら個に応じた対応のノウハウも蓄積する必要がある。
- ▶子どもの居場所としての学校が先生方によって守られているということを学校を見させていただいたり、話をうかがって感じる事ができた。佐伯市にとっての当たり前が、全国的に見れば当たり前ではないこともあることも念頭に置きながらどこに行っても通用する子どもを育てていきたい。



市教育委員会高野課長による説明

**(2)「地域とともにある学校づくり」に向けたコミュニティ・スクールと「協育」ネットワークの連携について**

《取組》

- ▶市教委の取組としては、「協育ネットワークの充実」「コミュニティ・スクールの充実」を核に進めていく。
- ▶本年度より5中学校区17校でコミュニティ・スクール(以下、「CS」)を導入。来年度までにすべての中学校区、学校で導入予定。

《導入による効果》

- ▶学校と地域が情報を共有することで地域の方々が学校に協力的になり、連携した取組が組織的に行えるようになるとともに、学校に対する保護者や地域からの苦情も減った。

【主な意見】

- ▶CSに参加する人選を吟味し、そこからしっかりした仕組みを作らないといけないと思う。
- ▶CSの取組、ふるさと創生の取組、総合的な学習の時間の外部人材との関連付け、学力向上も含めて一体的に取り組むことが今後の地域にとって大事なこと。



各学校の取組を説明する学校長

【意見交換会を終えて】

(土崎市教育長)

- 学校・家庭・地域による熟議の大事さを再認識させられた。
- CS を形式的な制度として導入していくのではなく、「これはいったい何なのか」「子どもが地域と関わるこ  
とが求められているのか」といった疑問をもつこと、当事者意識とはそういうものだと思う。
- 学校と地域が子どもたちを真ん中において、子どもの育ちについて熟議を重ねることがひいては大人の  
学びにつながっていくような関係ができるといいのではないかと考えている。

(工藤県教育長)

- 市の極端な人口減少の中で、地域の教育力向上ということについて、市教育長をはじめ、教育委員の皆  
さん、そして学校現場の皆さんが大変な努力をしていただいていることをあらためて実感した。
- CS をうまく利用して、子どものために何かいいのかということをお互い考えを述べ合う、考えて前に進め  
るということが子どもたちへのより良い教育につながっていくと感じた。
- 蒲江翔南小学校で1年生と給食を一緒にすることができた。わずか十数人だったが、大変生き生きとし  
て、みんな私のところに寄ってきていろんなことを話してくれた。こういう子どもたちをしっかりと次の佐伯  
を担う人材に育てていく必要があるということを改めて実感した。